

街のアイデンティティプレイスとしてのバス停の活用*

Practical use of the bus stop as identity place of a town *

三宅正弘**・笹田明伸***

By MasahiroMIYAKE**・AkinobuSASADA***

1. はじめに

都市計画の視点として、まず中心市街地活性化に代表される様に、都市の中心部から考えるというものがある。ところが今日、わが国の都市環境は広大に郊外へ展開し、人々が住む生活空間において、必ずしも都市中心部との関係をもたないライフスタイルが定着している。それゆえに中心部の活性化には生活空間という視点が必要であろう。そして他方では、都市を中心部から議論するだけでなく、生活空間である居住地から考えるという視点がある。本研究の立脚点も、この「居住地」として捉え方にある。

この居住地という視点は、現代都市において、「中心市街地」や「商業地」と相對するようになってきたが、本来はそれぞれ乖離するものではない。それゆえに「居住地」という視点場の研究は、将来的には中心の問題にも寄与できるものであると思われる。我々が日々暮らす足元の環境が豊かであることが、しいてはその集合である都市の魅力を形成するものであると考えられよう。

本報告は、その居住地において、人々の結節点であるバス停に着目している。またバス停は、居住地に一定の間隔で置かれ、生活空間のなかで最もローカルなエリアにおける社会拠点のひとつとなっている。近年の歩いて暮らせる街づくりや、人間サイズのまちづくりの中では、重要な拠点となってくるだろう。また地域社会の中で、あいさつ程度の気軽なコミュニケーションの場は、濃厚な関係が必ずしも必要でなくなった現代における「気軽な社交」の場ともなるだろう。そして、情報がグローバル化する中で、逆に入手しにくくなったローカルメディア

*キーワード：地域社会、公共交通、生活空間、バス停

**正員、工博、徳島大学工学部建設工学科助手

***学生員、徳島大学工学研究科建設工学専攻

徳島県徳島市南常三島町2-1 徳島大学工学部建設工学科

tel 088-656-7578 fax 088-656-7579

(近隣店舗などの情報)要素をもつバス停が、日常的な生活の場の一部としての拠点としても期待できる。そして、このような経験から小さな地域におけるアイデンティティを感じる場(アイデンティティ・プレイス)としての可能性を考えたい。

ところが、特に地方都市においては、車社会が加速し、公共交通の乗客が著しく減少し、それによって公共交通の存続が困難になってきている。

それに伴い、全国各地でバス活性化のために多くの社会実験が行われているが、そのほとんどはバスの路線等に課題が集中している。そこで本研究では、バス停に着目した社会実験を行い、その成果をもとにしてバス停のもつ潜在力を明らかにするものである。生活環境にとって公共交通の必要性を疑う人はないが、それだけでなく身近な環境での拠点としてのバス停という捉え方も無意味ではないだろう。

2. 旧式バスとバス停の活用

近年、旧式バスの様式評価から、全国各地で旧式バスが、新規路線に登用される事例が増えてきている。また運行だけでなく、使用されなくなったバスを、リニューアルして店舗などに利用するケースも増えてきた。こうした試みは以前からも見られたが、近年の事例は従来には見られないコストをかけた事例が見られる。それらは旧式バス様式が持つ潜在力に関係しているのだろう。

またバスだけでなく、バス停についても、それがもつ場のイメージが空間デザインに活かされる事例が見られるようになってきた。本論ではそうして事例を整理して報告したい。

3. 旧式バスを利用したバス停の社会実験

この実験には、次の3つの視点で試みた。バス停のもつ公共性を、ポストを実験的に設置することでその利用実態を明らかにした。旧式バスの空

間の潜在力を考察するために、バスの広告掲示スペースを利用してギャラリーとした。今回は「なつかし鳴門写真展」を開催した。ローカルメディア（地域の地場の企業の看板）を集めてその情報発信を行った。（設置状況は図-1、2に示す）

このような実験を試みたが、本報告では、その実態を報告することが目的である。

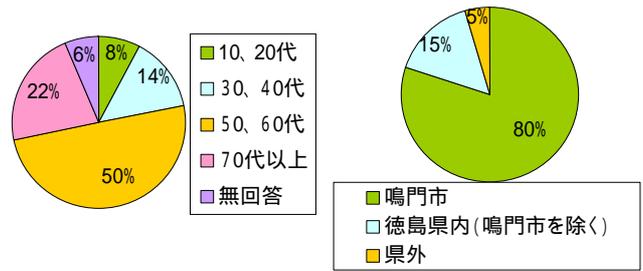


図-3 バス利用者の内訳



図-1 実験バス設置状況

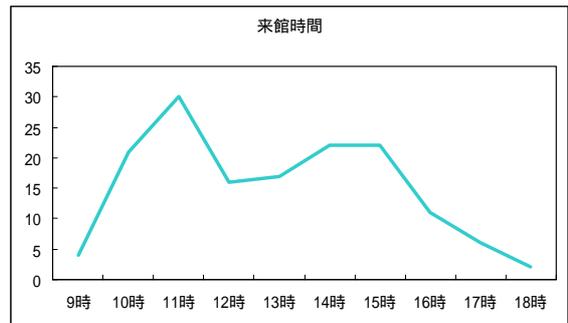


図-4 バス利用者来館時間

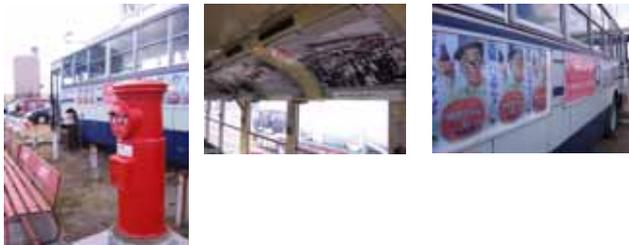


図-2 ポスト ギャラリー 看板の設置状況

表-1 社会実験運行バス利用者数

平成16 年月日	曜日	天気	ギャラリー-利用者数			郵便ポスト 投函数
			大人	小人	計	
1月10日	土	晴れ	28	3	31	0
1月11日	日	曇り	39	8	47	3
1月12日	月	晴れ	49	3	52	2
1月13日	火	晴れ	19	0	19	3
1月14日	水	晴れのち曇り	31	0	31	0
1月15日	木	晴れ	31	0	31	0
1月16日	金	曇り	25	0	25	0
1月17日	土	雪のち曇り	22	2	24	0
1月18日	日	晴れ	57	8	65	0
1月19日	月	雨のち曇り、晴れ	15	0	15	0
1月20日	火	晴れ	23	0	23	0
1月21日	水	曇りのち晴れ	30	0	30	0
1月22日	木	曇りのち時々雪	24	0	24	4
1月23日	金	曇りのち晴れ	28	0	28	0
1月24日	土	晴れ	46	5	51	0
1月25日	日	晴れ	47	3	50	2
1月26日	月	晴れ	29	0	29	3
1月27日	火	晴れ	35	0	35	0
1月28日	水	晴れ	33	0	33	0
1月29日	木	晴れ	53	3	56	0
1月30日	金	晴れ	46	0	46	1
1月31日	土		51	7	58	1
2月1日	日	晴れ	70	8	78	0
2月2日	月	雨の曇り	35	0	35	1
2月3日	火	晴れ	25	3	28	4
2月4日	水	晴れ	27	2	29	1
2月5日	木	曇り	26	1	27	1
2月6日	金	曇り	42	0	42	0
2月7日	土	晴れのち曇り、晴	66	13	79	1
2月8日	日	晴れ	90	19	109	0
合計			1142	88	1230	27

4. アンケート調査方法及び考察

アンケート調査は、アンケート票をバス待合所に常備し、被験者に「属性」、「訪問日時」、「感想・意見」をその場で回答、及び投函してもらう方法で行った。なお、アンケート統計データは標本数155、母数1230、標本抽出率12.6%であった。

アンケート被験者の大多数がギャラリーに対して、「興味深い」、「懐かしい」と回答しており、さらに、「見ず知らずの人との出会いに感動した」といったような意見も見られた。また、訪問者の特徴としては親子で訪れる人が多く、世代を超えたコミュニケーションの場としての可能性が伺える結果となった。

訪れた理由として、「通りがかりに立ち寄った」という意見が多く見られた。このことから、人間サイズのまちづくりのなかでは、今回の実験場所として選定したバス停が、地域の重要な拠点となっていることが言えるであろう。

5. 結び 旧式バスとバス停の潜在力

以上の実験の結果から、旧式バスについてはバス停という空間が有する潜在力として、郵便ポストの設置実験でもあきらかになったように、予告広報なしの設置にもかかわらず、一定の利用者の投函があったことも、バス停という場所のもつ公共性が明らかとなった。